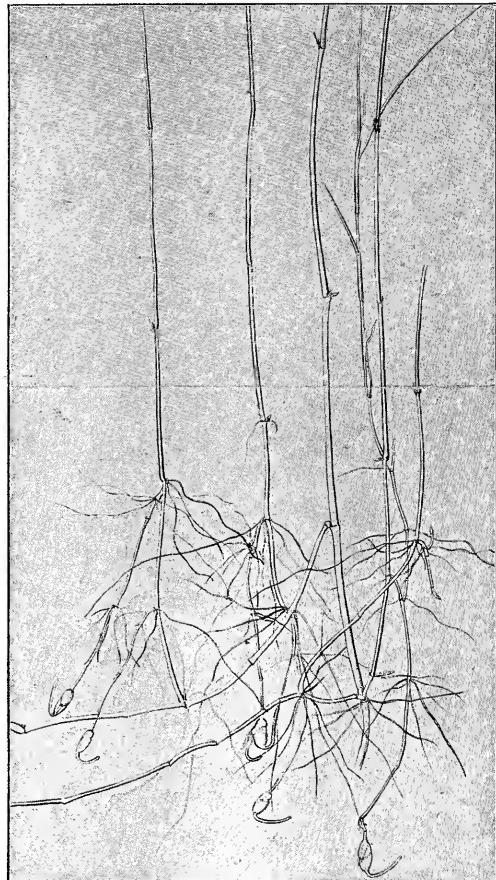


断枝片葉(其五十六)

○断枝片葉(其五十六)

邦デハ通常海ニ近キ堤防内ノ水中ニ生ズルガ又時トシテハ野州日光山ノ湯湖ノ如キ山中ノ湖ニ見ル事モアル(即チ同湖水デハ湖畔ニ湧出スル温泉ノ影響ヲ受ケテ爲メニ水ノ温ンデキル場處ニ生ズルヲ見ル)、全草沈水シ其葉ノ下部ハ托葉之レニ沿着シ一ノ鞘ヲ成シ莖ヲ包ミタル特徴ガアル



りゅうのひげも (Potamogeton pectinatus L.)
(同上) (縮圖)

ヲ観味シテ讀ンデ見ルト其
様子ガりゅうのひげもニ能
ク吻合シテキルノヲ見受け
ル、故ニ私ハ水豆兒ハ疑モ
ナクリりゅうのひげもデアル
ト斷定スル事ヲ躊躇セヌ結
果ニ到達シタノデアル
りゅうのひげもハ其學名ヲ
Potamogeton pectinatus L.
ト云ヒるむしろ科ノ宿根
生水草デ廣ク北亞細亞、印
度、北歐、亞弗利加、北米
並ニ濠洲諸地ニ分布シ、我

●茜染

茜染ハあかねノ根ヲ原料トシテ絹布ナドヲ染メシモノナルガ今日デハ之レヲ染メル處断エテ無クシテ僅ニ在ル有様デ中々得難イガ私ハ先年秋田縣花輪町ノ小田切健造方デ之レヲ絹地ニ染メサセシ事ガアツテ今手許ニ此レガアルガ今日デハ甚ダ珍ラシイ、其色ハ黃赤デ宛モ紅花ヲ以テ染メタ絳絹ノ色ノ褪メタ様デアル、昔ハ茜染ハ普通デアツタガ後ニハ蘇枋ヲ以テ染メタノヲ茜染ト云ッタ場合モアツタノ事デアルガ成ル程私ノ幼キ時分ニ其ンナノヲ見タ事ヲ覺エテキル、東牖子田宮仲宣ガ編シタ『鳴呼矣草』一ノ卷ニ「茜を以染たる絹布とも潮の風にあえばいよ／＼色よく侍るとて船幕を染るは茜を用うる事なり今京師にて茜を以ものを染るに上品を山料茜^{ヤマヨリアカハ}と稱す古來蘇木^{スズキ}の舶來せざる先是み名茜を以染尤城^{ヒタチ}昂山^{ヨウサン}科工みに染出せしにや今は蘇枋^{スズハ}を以染しものを郷里^{カミ}により茜染といえるは古名の殘れるなめり」ニ茜染ニ就テ此様ニ記シテアル

●あこだうり

あこだうりハ南瓜屬ノ一種デ *Cucurbita Pepo L.* var. *Akoda* MAKINO. ト稱スル、之レヲ *C. moschata* DUCH. トシタ人ガアレドモ穩當デナク此レハ南瓜即チぼうぶらノ學名デアル、此瓜ハ平圓ナ形ヲシタモノデ皮ハ硬ク膚ハ平滑デ熟スレバ黃赤色ヲ呈スル、往昔我邦ニ渡リ來タ事ガアツテ其時ニあこだ即チ阿古陀ト其レヲ稱ヘタ其後久シク世間ニ跡ヲ絶ッテキタガ近來復タチヨイ／＼之レヲ見受ケルヤウニナツタ然シ今日デハ誰レモ之レヲあこだト呼ブ者ガナイ、ツマリ今日ノ人々ハ昔稱ヘラレタ名ヲ知ラズニキルノデアル、東牖子ノ『鳴呼矣草』ニ「阿古多瓜^{アコダハ}と云もの夏日よく人の賞翫せしに今は絶て見侍らず隨分美味なる物にて其產地より瓜毎に印など押て出せしに近世^{すいは}西瓜盛^{カク}なりしより阿古多瓜を作らず西瓜は清土^{カムカ}にも古く傳はらずと見えて元の世祖西征の後西域より種を中夏に入ると五難姐に見えたり本朝には寛永のころ琉球より薩摩^{サモ}へ渡る長崎には慶安の頃漸有とかや京大阪へ來るものは寛文延寶の比勢州津の商賈植初しとぞ阿古多瓜モ今はなきにや」ト見エテキル、貝原ノ『大和本草』卷ノ八ニハ「アコダ瓜 京都ニ多シ南瓜ニ似テ小ナリ味不^レ好其蔓長ク其葉蜀葵ニ似テ大ナリ黃花ヲヒラク南瓜ヲアコダト訓スルハ誤レリ」ト記シ、小野蘭山ノ『本草綱目啓蒙』卷ノ廿四ニハ「又一種アコダウリ

ハ形小ニシテ六寸許正圓ニシテヒダナク皮色赤シ集解ニ或紅ノ字アレバ紅南瓜ト名ヅクベク汝南圃史ニ南瓜紅皮如丹楓色ト云ハア「コダウリナリ」ト述ベテキル、又畔田伴存ノ『古名錄』卷ノ四十三、阿古陀ノ「集註」ニハ『殿中申次記』ヲ引テ「六月十八日阿古陀五籠例年進上之八幡田中」ト記シテアル此レガ蓋シ阿古陀トシテあこだうりノ名ノ書カレテアル始メデアラウ、畢竟あこだうりハあんじうぐわ(C. Pepo L. var. Kintogua MAKINO)ノ姉妹品デアル

●うけゆり

ズット以前ニ横濱植木會社ノ需メニヨツテ同社ヨリ持チ來ツタうけゆりノ

ヲ寫生シ之レニ實物通リノ彩色ヲ施シテ同社ニ渡セシニ其圖ガ當時ノ『日本園藝會雜誌』ニ掲グラレテ廣ク世ニ紹介セラレタガ此レガ抑モ本品唯一ノ圖デアラウト思フ、頃日『成形圖說』ヲ繙イタラ其卷ノ三十二うけゆりノ記事ガ出テキルガ但花色ガ純白デアルト云フノガ私ノ寫生シタ前記ノうけゆりトハ少違ガアツテ私ノハボンノ微シノ紅色ヲ帶タ白色デアツタ、右『成形圖說』ノ文ハ「承百合」此花は傾き開す上に仰で托開る故にかくいへり一説に浮野百合の略なり浮野は南島海見島の屬島にて周匝四里九町許なる小島なり此島にこの百合の自生多にありて花さへ香さへ他の所にあふるものより勝りたりければ分て名高し浮野を傳信錄國誌略などの書に鳥奇奴と作るは浮野を假字書せしなり春より芽を生すまた袂百合に似て但葉狹長なり五月の頃花を開く潔白光潤ありて其蕊赤褐色芳香ことに深く遠く聽ゆ花謝てまた蕊を結ぶ是亦袂百合の如く平地にては培養がたし」デアル

●あまだまし

あまだましハ亞麻驅しデ其草狀ガ亞麻ニ似タ外觀ヲ以テキルノデ其レデ始メ松村

任三博士ガ大學デあまだましノ和名ヲ付ケタガ其時分ニ大沼宏平君ハ之レヲあまもどきト新稱シタ、始メ其學名ヲ大學デ松村博士ガ Nierembergia gracilis Hook. トシテキタノデ明治十九年ニ出版ニナツタ『大學理科大學植物標品目錄』ヲ始メトシテ明治四十五年出版ノ同博士著『國植物名鑑』下卷後編、大正五年出版ノ同ジク『訂植物名彙』後編ニハ悉クサウナツテキル、後此レハ N. frutescens DUR. デナケレバナラヌコトガ判ツタノデ今日ハ此學名ヲ用ウル事トナツテキルガ尙書物ニヨツテハ偶マ誤用シタ舊トノ學名ヲ今尙ホ踏襲シテキルモノヲ見受



ひめあまだまし

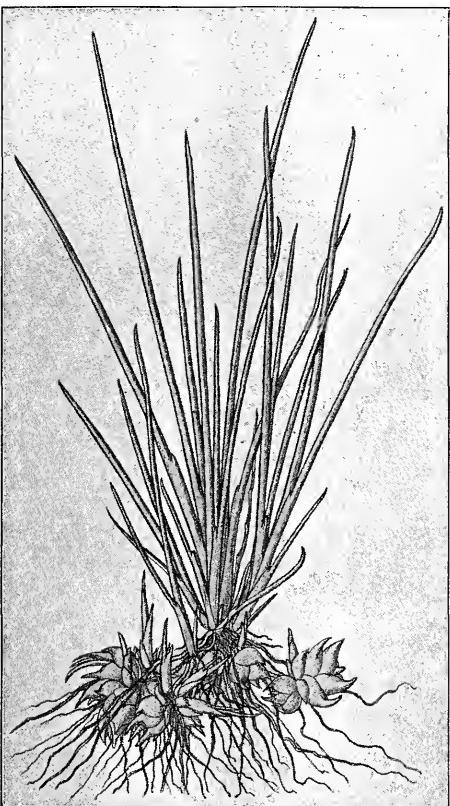
(Nierembergia gracilis HOOK.)

ト呼ンダ、同屬ノ一種ニ^{あんあかづき}ト名ケタ一草ガアツテ或ハ盆栽トシ或ハ花園ノ縁ナドニ栽エテアルノヲ見受ケルガ此品ハ莖ガ地面ヲ這フテ繁殖シ盛ンニ大ナル鍾状ノ白花ヲ開クノデアル、此レハ *N. rivularis* Miess. ノ學名ヲ有スル者デ俗ニ White-Cup ト呼バレテキル、此等ハ南米アルゲンチナノ所產デアルガ然シあまゐじんハチリ國ノ原產デアル、所屬ハなす科。

● 黄櫨ハはじのきデハナイ 支那ニ黄櫨ト云フ樹木ガアル、其材ガ黃色ナカラ布帛ヲ黃ニ染メルニ使用スル、其圖ガ『救荒本草』ニ出テキル即チ *Rhus Cotinus* L. デアル、我邦デハ古來此黄櫨ヲ^{はじ}_{(ア)ル}『^(同名ガ)』一名はぜの^み_(上)一名やまうるし、一名はぜうるし、古名はにし、即チ *Rhus triacarpa* Miq. ニ充テ『倭漢三才圖會』ニハ「按ズルニ黄櫨ハ以テ黃色ヲ染ム天子ノ御袍ヲ^{ワラロゼン}黄櫨染ト稱ス是レナリ」文記シテアル、はじ^(= やまうるし)ノ心材ハ黃色ダカラ之レヲ染料ニ用キ乃チ該樹ヲバ黄櫨ニ充テタモノダガ其レハ幸ニ同屬ノ品タルハ失ハナカッタガ其種ハ適中シテキナカッタ、サスガニ小野蘭山ハ之ヲ看破シ其著『本草綱目啓蒙』ニハ黄櫨ヲ「詳ナラズ」ト記シ之レヲはじニ充ツルノ非ヲ明カニシテキル

●ほそばのかうがいぜきしゃうの一特徴

Juncus papillosum FRACH. ET SAV. の學名ヲ有スルほそばのかう



地中ニ冬芽ヲ有スルほそばのかうがいぜきしゃう
(*Juncus papillosum* Fr. et Sav. with the
subterranean bulbils.)

がいぜきしゃうハ我邦諸州ノ湿地ニ生ジ外觀ハはりかうがいぜきしゃうニ似タ品デアルガ其花ガ三個許小梗頂ニ相聚リ且其蒴果ガ高ク花蓋上ニ超出シテキルノデ直ニ識得セラレル、本種ニハ一ノ殊態ガアル其レハ晚秋初冬ノ候ニ及ンデ其地下部ニ絲狀ノ短匍枝ヲ發出シ其末端ニ肥厚質ノ鱗片ガ層々相重ナリテ白色ノ冬芽ヲ形成スル事デアル、此芽ハ一株ニ多數相群リテ生ジ株ヲ地カラ掘テ見テ此レガアルノニ愕クノデアル、ソシテ此現象ハ夏ニハナク唯年末ニ近ク始テ見ラル、ノミデアル、畢竟次年ノ生存用意ヲシタモノデアル、其レ故花アリ或ハ正ニ成熟セル果實アル際ノ標品ニハ尙敢テ之ヲ見ルヲ得ナイカラ此ノ如キ標品ニ基テノ各學者ノ本種記載文ニハ一切此芽ニ就テノ叙述ガナイノハ寧ロ當然ノ事デアル、故ニJuncaceae 即チハ科植物ニ就テノ權威者ナルサスガノ Fr. BUCHENAU 氏モ此點ニ就テハ之レヲ見逃ガザザルヲ得ナカツタ、私ハ以前東京郊外ノ中野、堀ノ内間ノ地點デ其レヲ採集シ當時寫生シテ置タモノガ此ニ掲グル圖ナノデアル、近クハ昨年攝州六甲山上ノ池畔デモ亦之レヲ見且採ツタ事ガアツタ